アメリカの小児病院

「小児病院」

監訳を終えて

国立小児病院麻酔科医長
宮坂　勝之

信州大学医学部卒業。国立小児病院で研修。トロント大学、ペンシルバニア大学へ留学。本の舞台となったフィラデルフィア小児病院ではICUフェローとして勤務。現在国立小児病院麻酔科医長。

さる7月、「小児病院」（ペギー・アンダーソン著、小林登監修、西村書店）という本が刊行された。本書は、アメリカで最も古い歴史をもつフィラデルフィア小児病院を舞台としたノンフィクションで、6人の小児患者を中心に、家族や医師、看護婦、ケースワーカー、ボランティアなどの様子、考え方、心の動きなどが、生き生きと描かれている。

そこで、監訳者である国立小児病院麻酔科医長の宮坂勝之先生に、「小児病院」の内容、また日米の小児病院のあり方や医療の違いなどについて、話を伺った。

監訳を引き受けられたきっかけは。

宮坂：アメリカやカナダの小児病院と日本の小児病院はずいぶん違います。その違いはどこにあるのか、日本の人達に知ってもらいたいと思ったのです。その点、本書は、作者が何ヶ月も病院に泊り込み、沢山の人に取材をして書き上げたものですから、あり方が細部まで非常に生き生きと描かれています。

日米の小児医療の最も違っている部分はどんな点ですか。

宮坂：根本的に違うのは、病院全体が徹底して子供のために出来ていることです。例えば、ここ（国立小児病院）の玄関を入って来ても、特別に子供の病院だという感じはしませんよね。ところが、むこうの病院では、入った瞬間から、子供の病院らしい雰囲気が漂っています。あらゆる面で、子供への配慮がなされているのです。本書でも、患者のベッドでは、痛みのある処置は決してやらないとか、食事に対する配慮など、具体的な例が沢山でてきます。面会は24時間自由です。そういうことが小児病院の医療のポイントですし、作者もそれをよくつかんでいるのです。本書を読むと、実際に日本とアメリカの小児病院がどう違っているのかということが、雰囲気として伝わってくる。そういうところが良いと思いました。

翻訳で苦労されたことは。

宮坂：作者は専門用語を沢山使っています。例えばドレインチューブについての説明など、技術的なことまで実に詳細に書いています。それらを理解しやすくするために、訳註をつけたり、日本とは異なるアメリカの病院のシステムの解説を書いたりしました。また、いくつかの話がオムニバス形式で出てきますし、登場人物も多い。このあたりを読みやすくするのが大変でした。

ケースワーカーやボランティアなどの人達も沢山出てきますね。

宮坂：アメリカの医療の優れているもうひとつの点がチーム医療です。分業体制がとてもしっかりしている。僕自身、初めてトロントの病院に行ったときに驚いたのですが、日本の病院では、例えば血液ガスの検査でも、自分で採血し、機械をキャリブレーションし、データを出すというように、すべて自分でやっていたのです。ところが、アメリカやカナダでは、血液ガスのデータをとりたいと言えば、担当者が結果を出してくれる。ですから、医師は余分なことに時間をとられることなく、勉強したり、患者さんや両親とじっくり話をすることができるのです。

看護婦さんの仕事についてはどうですか。

宮坂：仕事の内容そのものがかなり違います。例えば、患者さんが入院すると、看護婦さんがお茶を入れて持ってきて、それを飲みながらゆっくり話が始まるという具合いです。それだけゆとりがあるのです。つまり、看護婦は、『看護』という別の側面から患者さんに接しているわけで、それが日本よりもはっきりと現れています。医者が『病気を治す』視点で患者さんを診るのに対し、看護婦は、『健康を維持する』という独自の方向から患者をみている。医者は死ぬほうからみて、看護婦は生きる方からみると言ってもよいかもしれません。アプローチのしかたが違うわけです。この本に描かれているような看護婦と患者さんとの関係は、日本ではなかなかできません。その理由は、日本では、医者と看護婦以外のスタッフ、セクレタリーとか検査技師がほとんどいないからだと思います。

アメリカの小児病院はどこでも、ただ病気を治すだけではないという考え方が根底にあって運営されています。僕も、カナダとアメリカでの体験を通して、医療に対する姿勢が謙虚になったと思いますし、できれば、将来、この病院もこの本に書かれているようなものになるよう努力していきたいと思っています。